



日本語ヴォイス構文の指標的機能と話者の選択
Indexical Functions of Japanese Voice Constructions and Speaker's Choice

Otsuka Hiroko

Faculty of Cultural Sciences, Padjadjaran University, Jatinangor, Indonesia
otsuka12001@mail.unpad.ac.id

ABSTRACT

In previous researches Japanese voice constructions were examined as devices for managing discourse coherence by indicating a person as the focus of attention or of speaker's empathy. However, in that discourse function a speaker cannot choose the function because it is automatically determined by grammatical and cognitive ways. Previous studies rarely studied the context constitutive choice made by a speaker in every actual language use. This paper aims to explain the functions of Japanese voice constructions which can potentially be a set of options for a speaker's choice in a discourse, and then examines the speaker's motivation for the choice made. Introspective and intuitive research method is used to explain the set of options and motivations of speaker's choice, and each set is assumed to be formed paradigmatically based on functional linguistic theory. The functions of constructions are explained as indexical functions which is developed in the theory of anthropological linguistics. Indexical functions examined here are conventional grammatical knowledges shared in a particular language community. The data used are personal narrative ones. Therefore, the speaker's focus of attention or empathy no longer need to be questioned here, because in the personal narratives the speaker itself is cognitively the focus of attention. The analysis shows that the indexical functions of constructions chosen by the speaker is roughly divided into two types of indexicals, the first is referential indexicals which express the locus of speaker, directionality, causality, and affectedness of actions, evaluative attitudes towards events, social statuses and powers, and mental attitudes. The second is nonreferential indexicals that express socio-cultural attitudes.

KEYWORDS

indexical functions, Japanese voice constructions, personal narratives, speaker's context constitutive choice

ARTICLE INFO

First received: 19 July 2019

Final proof accepted: 00 month 2xxx

Available online: 00 month 2xxx

1. はじめに—研究の背景と目的—

日本語のヴォイス構文の使い分けについてのこれまでの研究では、ヴォイス構文は話者の注意の焦点または共感の対象である人物や物を示

すことにより談話の結束性や一貫性を維持するための装置として議論されてきた。しかしこの文法的談話機能は認知的かつ無意識的に決まるもので、話者が意識的選択をした結果ではない

し、話者による日本語ヴォイス構文の使い分けの実際を示すものでもない。

Verschueren (1999:197)は、言語使用は、意識の程度の差こそあれ、話者のメタ語用的意識に基づき言語形式の選択であるとするが、本稿ではヴォイス構文の使い分けを、話者のコンテキスト構成的考慮に基づく選択の結果であり、話者は構文の機能を選択することでコンテキストを創り出していると考え、これをコンテキスト構成的選択とよぶことにする。

ヴォイスはどのような文にも必須の文法要素であり、また言語の主要機能のひとつである「個人の経験を語る」という重要な機能に深く関係している。日本語のヴォイス構文の使い分けの実際を明らかにするためには、母語話者の構文の選択動機を説明する必要がある。「構文動機」の文法的記述の必要性を指摘した日本語教育分野での研究にはフォード丹羽・小林・木戸・松本 (2000)がある。当該研究ではヴォイス以外の文法形式や、従属節などの文形式も含め、「頭の中概念を言語化すること」を「構文動機」として、日本語を母語としない学習者のために文法記述することを提案している。フォード丹羽らは、文の生成過程には社会文化的背景が要求する表現の選択があると述べてはいるものの、その研究の範囲は「文法形式」の選択における「注視点」としての「視点」の置き方に基づく「選択」の記述に限定されており、本稿で意味する話者の選択ではない。

本稿では、いわゆる「文法形式」であるヴォイス構文にも、社会的文化的コンテキストに関係する選択の動機があると考え。母語話者のヴォイス構文の選択というテキストの生産を体系的に説明するためには、社会的文化的コンテキストにまで及ぶ構文の機能と選択の説明を可能にする統一的理論と方法論とが必要とされる。

まず、ヴォイス構文の機能とは、出来事・事態(event and situation)を表現する機能である。パーソナルナラティブ (以下PNと略す) は、話者が自らの経験した出来事・事態 (以下「事態」)を語るものであり、その事態を語るための基本的言語装置は動詞述語文であるヴォイス

構文である。話者はヴォイス構文の諸機能を用いて、自分が把握 (construe)した事態を語るのである。認知言語学では、意味は概念化である (Semantics is conceptualization)と考える (Croft and Cruse 2004:40)。人間は物事を異なる側面から把握する能力を持つ。つまり、事態は所与の現実ではなく、話者が認知し把握したものを言語のフィルターを通して表現したものである (Slobin 1996:75)。

事態を語るための言語装置であるヴォイス構文はひとつの事態の把握の仕方を表す認知スキーマである。例えば、能動文や受動文は動作者から被動者への作用を異なる方向から表すスキーマを持つ。ひとつの構文はひとつの認知スキーマを持つので、本稿の分析対象であるPNデータにおいても個々のデータは単一のヴォイス構文のテキストである。また、PNでは、話者は直示的認知的な起点となるので、分析の際、認知スキーマの方向性を話者を中心に遠心性、求心性として分析することができる。

ところで、実際の日本語のヴォイス構文の機能はスキーマが表すような作用の方向性だけに留まらない。話者はヴォイス構文を用いて、事態に対する話者の関与の仕方、受影性、事態に対する評価的態度、参与者間の親疎、社会的力関係や参与者への心的態度、そして、話者自身の社会的文化的スタンスなどを表現する。こういったコンテキスト構成的機能を統一的に説明するため、本稿では「指標性 indexicality」という、言語人類学と社会記号論の分野で Silverstein や Ochs によって精緻化された概念を用いる。指標性は言語の意味のうち、命題的、意味論的な意味以外の意味を指示(index)する機能であり、また現実世界のコミュニケーションのコンテキストにテキストを位置付ける(投錨する)機能を持つ (Silverstein 1976)。片岡(2002)は Silverstein のいう指標性とは、「ある事物がコンテキスト内に『存在』することを示す記号の特性」と説明する。そうして、その指標機能を用いる話者は認知の起点であるだけでなく、「コミュニケーションの場の原点となる (Verschueren 1999:18)」わけである。

次に、本稿で述べる選択とは、ヴォイス構文間で恣意的に行われるものではなく、ヴォイス体系の中で、限定的な選択肢の間で行われるものである。ヴォイスを一つの体系として捉える際注目するのは、機能の点で「類似した」構文の存在である。それらは例えば、益岡(1991,2001)、田中(1996, 2004 他)、山田(1999)、高橋他(2006[2005])、澤田(2006)ほか多くの研究者によって指摘されてきた、受身文と「テモラウ」文の間や、使役文と「テモラウ」文の間に見られる機能の類似性である。本稿の立場では、構文の類似性は代替性ではなく、意味の相補的関係と捉えるべきで、その構文間の意味機能の違いこそ、話者が選択の際考慮していると考えられるものである。こういった、選択肢と成り得る構文からヴォイス体系は出来上がっている。

Halliday (1994)は自身の文法理論を「選択(choice)の文法」と呼び、文法体系を意味産出の源泉と捉えて、テキストはパラダイグマティックな選択肢というセットの中から選択され産出されていく(Halliday & Matthiessen 2014)とする。本稿では、話者が実際に選択し使用したテキストとともに、選択の際考慮したと考えられる、相補的意味機能を持つ構文とからなる選択肢のセットを提示してコンテキスト構成的選択を分析する。選択される可能性のあった選択肢を提示する理由は、「一つの選択は他の選択されなかった選択肢を想起させる」からであり、「コミュニケーションの効果はその選ばれなかった選択肢から得られる」(Verschueren 1999:58)ものでもあるからで、話者が選んだコンテキストの説明にとっても欠くべからざるものである。

本稿では、ヴォイスの機能を「話者の経験を語る」という機能に限定して分析するという、これまでに行われたことがない研究手法と、認知・機能言語学的見地と指標性の理論を統一的理論、方法論として用いることで、話者によるヴォイス構文の選択をより体系的に説明できると考える。ヴォイスは、西洋の言語学では、命題の表現に関わるカテゴリであるとされてきた。そのため、日本語においてもヴォイスは、「客

観的な意味」である命題の意味を表す部分と考えられ、話者の感情や心的態度などの「主観表現」はモダリティの分野に属すると考えられている。そのため、ヴォイス構文の表す話者の感情や心的態度などについては、一部の構文で個別に論じられることはあっても、ヴォイス体系における話者の構文選択という観点からの研究は行われてこなかったのである。本稿では、ヴォイスの選択を指標機能で説明することにより、話者によるヴォイス構文の選択が何に基づいて行われているかを明らかにし、そして、日本語においてはヴォイスも「主観表現」の装置であることを明らかにする。

2. 理論的枠組み

2.1 ヴォイス体系を構成する構文

言語によってヴォイス構文の種類は異なる。また、日本語のヴォイス体系を成す構文の種類も研究者により異なる。本稿では、ヴォイス体系を意味機能的に相補関係にある構文の集合と捉え、ヴォイス構文を識別している。一般的にヴォイスは、能動、受動、使役という形態論的ヴォイスを中心とする狭義のヴォイスと、自他動詞対応や語彙的使役、「売る」と「買う」の対応など語彙的ヴォイスまでを含めた広義のヴォイスに大別される。

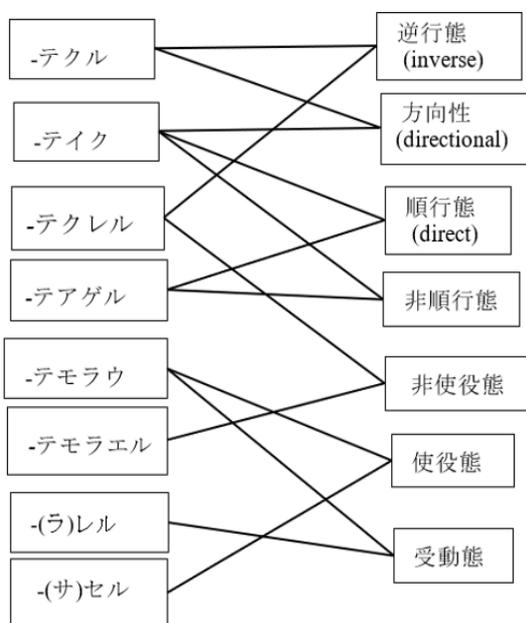
狭義のヴォイスの見解の中でも自他対応を重視する研究は多く、寺村(1982)は自他対応を形態論的ヴォイスに優先的すると指摘し、野田(1991,1995)、野村(1995)は重要なヴォイスと位置付けている。また、益岡(1984, 1987)は能動と受動が「テイル」「テアル」表現と関連することを指摘している。

本稿で扱うヴォイス構文の識別は、ヴォイスを広義に捉える見方をする村木(1995[1991a], 1996[1991b], 1999[1989])、早津(2005)、佐藤(2007[2005])などの見解と、ベネファクティブ研究の立場からのヴォイスについての見解である山田(1999, 2000-2002)、澤田(2006)、そして、

逆行態の研究における柴谷(1997, 2000)、坂原(2003)、住田(2010)のヴォイス的見地などを参考に行い、以下の構文をヴォイス構文として識別した。

(i)他動詞能動文、(ii)自動詞文、(iii)使役文、(iv)受身文、(v) ~テヤル/~テアゲル、~テクレル、~テモラウ構文、(vi) 方向性を表す構文 (テイク、テクル)、(vii) 可能・自発構文、(viii)話者の「見え」を表すアスペクト形式の~テイル、~テアル、(ix)複合形式 (~サセテモラウ等)。

このうち、(vi)の方向性のテイク形式には順行態としての使用と文法的に必須となる使用とがあり、テクル形式には逆行態としての使用と文法的に必須となる使用とがある。また本稿では、話者の事態への関わり方を「経験者」²⁾と「観察者」に分けて考えている。「経験者」の場合、(i)、(ii)、(iii)、(iv)、(v)、(vi)および(ix)の構文が用いられ、「観察者」の場合、(ii)、(vi)、(vii)、(viii)に加え、(iii)と(viii)との複合形式も用いられる。



Otsuka (2018 b:3)

図1: 助動詞とヴォイス機能の関係。

図1はヴォイスとして機能する助動詞と各態の機能の関係を表したものである。本稿ではヴォイスの形態論的接辞や「補助動詞」にはすべて「助動詞」という用語をあてている。(viii)のアスペクト形式の~テイル、~テアルと、助動詞というマーカーを持たない(i)と(ii)は同図には含まれていない。

また、順行態、逆行態という用語は日本語のヴォイスでは一般的でないが、この概念はコンテキスト構成機能的に重要である。それらの定義等については後述する。

2.2 指標的機能

本稿で用いる指標の概念はSilverstein (1976)の「(言及)指示的指標 (*referential indexicals*)」と「非(言及)指示的指標 (*nonreferential indexicals*)」という概念である。指示的指標とは意味指示的 (*semantico - referential*) 内容に貢献する指標であり、非指示的指標とは意味指示的内容に貢献しない指標を言う。この指標性にヴォイス構文の機能に当てはめると、話者の位置や事態の遠心的、求心的といった方向性、現前性(見え)、原因・結果志向性、使役性等のスキーマ的意味や、受影性、事態の評価、親疎や社会的力関係、参与者への心的態度などの意味機能が指示的指標性に含まれ、話者が示したい社会的文化的スタンスが非指示的指標性に含まれる。なお、二種類の指標性の間には、親疎や力関係、参与者への心的態度のように両方の指標性にまたがる性質を持つと考えられるものもある(Otsuka., Suganda., Kaswanti Purwo., Sobarna. 2018, Otsuka 2018)。

この二種類の指標性を用いることにより、様々なヴォイス構文に対する諸家の研究成果を統一的に分析に用いることができる。例えば、山本(2002a, 2002b, 2003)で論じられている受益、受害、好悪感情などは指示的指標性として、また、語用論的効果等で説明されていた機能は非指示的指標性などとして考えることができる(Otsuka 2018)。本稿では、指標的機能の知識は、語用論的知識ではなく、慣習的文法知識であると考えている。

2.3 話者による選択とコンテキスト構成的機能

話者の選択は、文法によって与えられる限られた選択肢の中で行われる。その選択肢はヴォイス体系の中の、コンテキスト構成的意味機能において相補的關係を成す構文から成る。例えば話者がある事態の「経験者」で、(1)a が実際に選択されたテキストだとすると、パラダイグマティックな潜在的選択肢として(1)b と (1)c を考えることができる。三つの文は意味指示的には同義であるが、指標的に異なっている。

- (1) a. 昨日ある友人が訪ねてきた。
b. 昨日ある友人が訪ねてきてくれた。
c. 昨日ある友人に訪ねてこられた。

この潜在的選択肢は、母語話者が慣習的文法知識に基づいて想起できるものである。話者が(1)a を使ったことによって、聞き手は(1)b が持つ受益や、(1)c が持つ被害を表す指示的指標機能が使われなかったを理解するだけでなく、話者が友人の来訪という事態に対する当面の評価を避けているのだということを理解する。そして聞き手は、話者がこの後のテキストで友だちの来訪をめぐるある話を展開するための雰囲気を出すコンテキスト化(*precontextualization*)を行ったことを理解するのである。

指標の機能には、二種類の指標性が表すコンテキスト構成的意味と、それらの指標機能を通して行う「コンテキスト化 (Silverstein 1976, 2001[1981]) ; Ochs (1992:345)」の機能がある。Ochs はコンテキスト化を再コンテキスト化(*recontextualization*)と後続テキストのコンテキスト化(*precontextualization*)とに分けている。本稿ではそれらすべてを含めてコンテキスト構成的機能と呼ぶ。

3. 研究手法

この研究では定性的分析手法を用いる。話者のヴォイス構文に対するコンテキスト構成的選択という、言語現象の「過程」の側面を扱って

いるとも言え、Moleong (2007:7) の定性的研究手法の利点にも合致する。分析において、話者が実際に行った選択と、その潜在的選択肢であった構文を、パラダイグマティックな選択の *set of options* として提示するために、研究者の母語話者としての内省を用いる。

母語話者による内省の有効性については Mahsun (2005:90f)、大島 (2011)、松本 (2011) 等で詳しく論じられているが、本稿での内省は容認性判断に用いるのではなく、指標の意味を記述したり、潜在的選択肢を提示するために用いる。

PNのデータは、認知的に話者が直示の中心であり、「経験者」または「観察者」として事態に関与している構文を、書きことば、話しことばを問わず収集したものである。一人称の使用はPNの条件ではない。

4. 結果と考察

図 1 で示したように、日本語の態とマーカーの助動詞は一対一で対応してはいない。そこでヴォイスを態の機能から見るか助動詞から見るかという問題が起きる。本稿では、態の機能から見ての構文の選択肢とその機能を論じる。それぞれの態の機能はアクチュアルな選択肢と潜在的選択肢の中で触れていく。

4.1 使役態

使役態に対応する助動詞は ~ (サ)セルと ~テモラウである。(2)a は話者の選択したテキスト、(2)b はその潜在的選択肢である。使役態の話者にはデータの観察から、使役者、動作者、知覚者の三つの役割がある(Otsuka 2018)が、以下の(2)では話者の役割は使役者である。

- (2)a. 夕方、哲生がやってきたら、私の大きな荷物を持たせて、両親のところへ帰って、しばらくはそ知らぬ顔をして穏やかに生活しよう。(哀しい予感)
b. 夕方、哲生がやってきたら、私の大きな荷物を持ってもらって、…

指示的指標としては(2)aの「持たせる」は遠心的方向性、原因志向性、強制、指示、依頼、参与者間の上下、もしくは同等な関係などの意味を指標し、(2)bの「持ってもらう」は求心的方向性、結果志向性、依頼、事態からの受益、参与者間の同等な関係などを指標する。参与者に対する心的態度は、指示的指標性から非指示的指標性にまたがる性質を持つが、(2)aでは姉が弟に対して示す「姉貴」的態度を指標し、(2)bでは話者の哲生を頼りたい和んだ心持ちを指標している。非指示的指標としては、話者は(2)aによって恋人としての哲生(血の繋がりが無い弟)に対する気持ちを当面の間は抑えて、姉らしいサバサバとした態度示す心構えを指標し、(2)bは受益に対する感謝を表すことができる社会的人間像を指標している。以上のような指標性の違いによって、話者は(2)aを選択し、コンテキストを構成している。

4.2 語彙的使役態

次の(3)aは語彙的使役態である。選択肢(3)bは能動態、(3)cは語彙的使役動詞に非使役態を表す~テクレルが共起している。(3)aと(3)cの使役者は哲生であり動作者は話者、(3)bは能動態で動作者は話者である。

- (3) a.この旅行中に、私は哲生の今までに私に 見せた ことがない表情をいくつも、いくつも見た。(哀しい予感)
- b.この旅行中に、私は哲生の今までに(私が) 見た ことがない表情をいくつも、いくつも見た。
- c.この旅行中に、私は哲生の今までに私に 見せてくれた ことがない表情をいくつも、いくつも見た。

(3)aの語彙的使役態の「見せる」では使役者は動作者を見ることを強制できない。この使役は、使役者自身が意図したものでない表情を動作者が見るに至った関係性を表す。一方、(3)bの「見た」は動作者(話者)の行動を表し、(3)a

のような関係性はない。(3)cは話者が受益者の自覚を持っていることを示すだけでなく、哲生の表情や人物に対して好感情を持っていることを指標している。(3)cとは対照的に(3)aでは、哲生が見せた表情が話者にどのような影響を与えたのかについては関知しないということによって、話者が経験した出来事そのものの意外性が指標されている。

指示的指標の意味は非指示的指標の意味に関係するものもある。非指示的指標として(3)aは話者が意外な事態に対し冷静な語りの姿勢を維持していることを示す。(3)bは遭遇した状況に話者の心が不安定になっていることを示す。そして(3)cは話者が些細な出来事にも敏感に恩恵を感じる人間であることを指標している。

以上のような指標の意味は次のようなコンテキスト化の機能を持つ。(3)aの指標性は哲生という青年のイメージについて、魅力的な青年であるという再コンテキスト化として働くと同時に、哲生の表情についての意味付けが後続のテキストで展開することを聞き手に期待させる後続コンテキスト化(*precontextualization*)としても働く。一方、(3)bは「行方の定まらない雰囲気」の後続コンテキストを創出し、(3)cは哲生と受益者としての話者との関係が良好であり、話者が受益に満足しているという後続コンテキストを創出する。

4.3 順行態

順行態(*direct voice*)は能動態と同じく、動作者が主語位置にあり、両者を同一視する見解もある(古賀2008, 住田2010a, 2011b参照)が、本稿では、能動態がマーカーを持たないのに対し、順行態はマーカーを持つという見解に従い、~テイクおよび~テヤル/~テアゲルを順行態マーカーとし、順行態を「ウチ人称の動作者からソト人称の被動作者・受影者(*patient/affectee*)に向かう動作」と定義する住田の見解に従う。住田も指摘するように、順行態の~テイクは生産性が低くデータは非常に少ない。そのことは~テイクの機能の文法化が進んでいないという

ことなので、~テイク構文の表す心的態度がネガティブか中立かについては、語用論的に決まる。~テイクの順行態は作例で示すと、「近所に文句を言っていた」のような使用例である。一方、順行態ではないのは、「近所にみやげを持っていた」のような文法的に必須となる使用である。

順行態の~テイルに比べ、~テヤル形式の使用頻度は高い。以下の(4)aは、~テヤルの順行態のテキストである。(4)bは能動態の選択肢である。

(4) a. つまり、十六日の夜、彼女は、正彦さんに会いに行ったのではないかというのだ。
私は、そんなはずはないと、署長に、
行ってやった。 (十津川警部の挑戦 下)

b. 私は、そんなはずはないと、署長に、
いった。

(4)bは「中立的な表現」とされている能動態である。これと対照すると、(4)aは話者の被動作者・受影者に対する対抗的な心的態度や、「してやったり」という感情を表していることが明らかである。順行態~テヤルは、同じく順行態の~テアゲルや~テサシアゲルなどと異なり、ネガティブな心的態度を指標する機会が多いが、異なる指標性もある。以下の(5)aを(5)bと対照してみよう。(5)aでは~テヤルの恩恵の授与という意味機能から、親密な、愛おしいという心情を指標することがわかる。

(5) a. (自分を)抱きしめてやりたくなる。
(キムチの夢)

b. (自分を)抱きしめたくなる。

次に、順行態の~テアゲル形式について述べる。~テアゲルと~テサシアゲルの違いは待遇の違いのみであると思われるが、指標性の観点からは別の違いがみられる。(6)aは順行態の~テサシアゲルのテキストである。このテキストは、エステサロンの広告である。

(6) a. 女性社長と4人のスタッフの、お客様をもっと癒してさしあげたい、…という強い思いからスタートしました。

(<http://www.cantic.jp/q-a.html>)

b. もっと癒してあげたい

c. もっと癒したい

山本(2003)は語用論的対人調節機能の論点から~テアゲルには、恩恵性の授与を表すものと表さないものがあり、前者は話者の聞き手との間の人間関係の認識(上下関係や話者の聞き手との親しさの認識)を示し、後者は話者の事態にかかわる立場の認識(専門的な立場にあるという認識や話し手の思い入れ)を示すとする。後者の使用法は、料理番組における「煮込んであげる」表現のように、モノに対して影響を与えるのであって聞き手には作用していないが、客である聞き手への待遇的配慮のために~テアゲルが用いられるのだと説明されている。

山本の説明では後者の用法は作用の対象がモノであるが、聞き手が被影者となる(6)aにおいても、専門的立場で関わっているという認識が非指示的に指標されていると考える。話者は専門家として「癒す」という施術の作用の成否を左右しているからである。

次に、山本(2003)では考察されていない、~テアゲルと~テサシアゲルの差異について考える。(6)a「癒してさしあげたい」には、(6)bの「癒してあげたい」と(6)c「癒したい」が選択肢として考えられるが、(6)cは広告表現としては「押し付け」が強く待遇度が不足する。

一方、(6)aと(6)bの違いは非指示的指標性の違いから説明できよう。(6)bの~テアゲルでは、親しさの認識は指標するが、不特定多数の広告の読み手に対して一方的に親しさを示すことは適当ではない。そこで、(6)aの~テサシアゲルを用いて、丁寧さ、上品なイメージやエステサロンの目指すエレガントな雰囲気指標しているといえる。

4.4 逆行態

逆行態は ~テクルか ~テクレルで表わされる。逆行態は「彼は私に手伝えと言ってきた」のように統語的にはソト人称の動作主が主語で、被影者が話者である。逆行態は統語的には動作者主語の能動態と同じだが、話者の立場から事態を表すので、方向性は求心的である。先行研究によれば「電話をかけてくる」は文法的に必須となる使用なので、方向性は同じく求心的だが逆行態ではない。また、~テクルはネガティブな、~テクレルはポジティブな事態評価に用いられる。(7)aは逆行態の~テクレルを用いた、小学生の作文のテキストである。

- (7) a. そんなある日、「このウサギ、かってくれる？」と、友だちのじゅんくんが言ってきました。(「南十字」新聞欄)
- b. 友だちのじゅんくんが言いました。
c. 友だちのじゅんくんが言ってきました。
d. 友だちのじゅんくんが言われました。

(7)b は能動態で事態評価は中立的であるとされるが、コンテキスト構成機能としてみると、自分の事態への関わり方を表現することを避けて、後続コンテキストへ事態評価を先送りしている。(7)c は逆行態の ~テクルなのでネガティブな事態評価と友人へのネガティブな心的態度が指標される。(7)d は受身構文的には中立の受身だが、コンテキスト構成的には(7)a や(7)b と対照して、ネガティブな評価や心的態度が表れる。話者が選択した(7)a は指示的指標性として恩恵性や喜びを表している。また、(7)a を選択することで、非指示的指標性として、小学校低学年の話者でありながら、円満な人間関係を築こうとする「社会的人間」であるというイメージも指標される。コンテキスト化の点から見ると、(7)a 以外の選択肢では、ネガティブなコンテキスト展開が予測されてしまう。また、作文を書いた時点で、新聞欄に掲載されることが分かっていたのであれば、読み手が不特定となる

ことへの配慮して(7)a の指標機能を選択することにもなるだろう。

次に逆行態の~テクル(8)aと受身文(8)bとを対照する。両構文とも動作、作用の方向性は求心的であり、またネガティブな事態評価を表す点で共通しているが、清水(2010)は両者の違いについて、逆行態には話者に向けられた動作を前景化し、影響を背景化する機能があると述べる。古賀(2008)も逆行態はプロセスをプロファイルするが、受身文のように結果はプロファイルすることはなくして、影響をキャンセルする機能であるとする。

- (8) a. 帰りに、教室に帰ったら、あの子がドアのところにいて、目が合いました。ジロジロ見てくるんです。(KOTONOHA)
- b. ジロジロ見られたんです。

(8)a の逆行態は、事態に対するネガティブな評価、心的態度を表すが、動作者の行為が自分に与えた影響については触れない。そのことで、不快な感情や動作者に対する対抗心を指標し、話者の「メンタルが強い」というスタンスも指標される。そして、対抗意識を維持したコンテキストという後続コンテキスト化が行われる。(8)b では心的影響に焦点があるので、影響を受けやすい人物像が指標される。そして影響について語るような後続コンテキスト化が行われる。しかし、逆行態の~テクルは常に不快感や対抗意識を指標するわけではない。次のテキスト(9)にそれを見ることができる。

- (9) 学生に英文を講読させると必ず「読みに」詰まる言葉があります。(…)「i. e.」もその一つ。もちろん「すなわち」という意味は分かって居るのですが、「どう読んだらいいのですか？」と大抵訊いてきます。
(<https://ameblo.jp/prof-hiroyuki/entry-10544507496.html>)

(9)以外の選択肢としては「訊かれます」か「訊きます」が考えられる。「訊かれます」は

結果の側面に焦点があるので、読み手の関心は話者が質問を受けたときの話者の状況に向き、「訊きます」は動作者である学生の態度や様子などに向くと考えられる。逆行態の~テクルは行為から影響を受けないことを指標するので、「学生の常としては仕方がないな」という話者の評価的態度も表わされる。そして(9)の非指示的指標性として、「学生よりも知識量がある教師としての話者」という人物像を指標するので、それらが(9)の選択動機となっていると言えよう。

4.5 受動態

受動態は求心的方向を表す~(ラ)レルか~テモラウで表される。(10)aは~(ラ)レルの受動態を選択したテキストである。潜在的選択肢は~テモラウ受動態(10)b、~テモラウと可能形の複合形(10)c、そして「教える」と語彙的対応を成す「教わる」(10)dの3構文が考えられる。

(10) a. 部屋のすみに息づき、押してくるそのぞっとするような静けさ、子供と年寄りがどんなに陽気に暮らしていても、埋められない空間があることを、私は誰にも教えられなくてもずいぶん早くに感じとった。(キムチの夢)

b.教えてもらわなくても…感じとった。

c.教えてもらえなくても…感じとった。

d.教わらなくても…感じとった。

上の4つの選択肢の指標性を対照して、アクチュアルな選択(10)aの動機を考える。(10)aは結果の側面に焦点があり、話者が教わることを欲したかどうかはわからない。また、教える可能性のあった特定の人物の存在や関係なども指標されない。(10)bは教わることに対するポジティブな評価を指標する。また、教えてくれる可能性のあった特定の人物の存在を指標する。(10)cは使役態の~テモラウに可能形が付いていることで非使役態~テモラエルとなっているが、否定形~ナイを伴っているので、かつて話者が特定の人物に教わることを直接的ないし間接的

に願ったが、それが叶わなかったことを指標する。(10)dの「教わる」は教育的な側面に焦点がある。そのため、「教わらない」は、本来知るべきことを周りの人間が教えなかったことを指標する。(10)aを選択することで、話者の「孤高のスタンス」という再コンテクスト化(recontextualization)を行っている。

4.6 話者が事態の観察者であるとき

話者が観察者で事態に関与しないときには、現前性・「見え」の表現に~テイル、~テアルが用いられる。(11)aは<自動詞+~テイル>、(11)bは<他動詞+~テアル>である。

(11) a. 私は(…)ぼんやり光る明るいその空を見ていた。窓の横にはその日の葬式にきてゆく喪服がかかっていた。(悲しい予感)

b. 窓の横にはその日の葬式にきてゆく喪服がかけてあった。

日本語のヴォイスでは、自他対応が優先されるので、「かけられていた」という受身文の選択肢についての議論は別稿に譲る。(11)aは動作者を指標せず、結果に焦点があるが、(11)bは話者が動作者の存在と行為の意図を意識していることを指標する。(11)aは(11)bが指標する意識を排除して、ぼんやり眺めた視線を移した先にあった喪服という情景を描いている。(11)aでは、時間の流れが遅く、けだるい空気のコンテクストが創出されるが、(11)bでは、喪服の存在に対する「気づき」が意識の変化や次の行動へつながるという後続コンテクストを創出する。

話者の「見え」の描写に用いられる構文は~テイルと~テアルだけではない。(12)は~テイル、(13)は使役態<~(サ)セル+テイル>の複合である。両者ともアクチュアルなテキストである。

(12) 食器はどれも(…)わけのわからないものがこびりついているし、…(ノルウェイの森)

(13) 流しには、あらん限りの食器が、カリカリに干涸らびた食べ残しを こびりつかせ たまま、(…)積み重ねられている。

(KOTONOHA)

(12)では干からびてこびりついた状況に焦点があり、構文そのものは話者の事態に対する評価を表さない。(12)でネガティブなニュアンスが生まれるのは、構文の影響ではなく、「わけのわからないもの」という言い回しや「こびりつく」という動詞の内包的意味の故である。一方の(13)では状況を引き起こした使役者の存在が指標され、事態に対する話者のネガティブな評価が指標される。

5. 結論

日本語のヴォイスは、話者がコンテキスト構成的機能を選択することで使い分けられる。ヴォイスは、指示的指標性としての、話者の位置や事態の遠心的、求心的といった方向性、見え、原因・結果、使役性、受影性、事態への評価、親疎や社会的力関係、参与者への心的態度などの意味と、非指示的指標性としての機能である話者が示したい社会的文化的スタンスや人物像を表す機能とがあり、それぞれの構文が異なる機能を持つ。話者は相補的な機能の構文からなる選択肢のセットから一つの構文を選択してコンテキストを構成する。選択肢を形成する構文機能の知識は慣習的文法知識に属する。

構文間の相補的意味機能は選択肢として対照することにより明確になるものもある。例えば、能動態は一般には中立的な表現と考えられているが、対照を通じて、不安定な心境、決断を渋る気持ちの表現や、事態評価を後続コンテキストに先送りするといった、「展開が読めない」という後続コンテキストの創出に使われることが分かる。

また、二種類の指標性の間の関係には、いくつかの関係性が見られる。語彙使役態の「意外性」が「冷静な語りのスタンス」へとつながったり、「恩恵性」が「事態への高評価」、そし

て「恩恵に敏感な人物像」や「待遇的配慮をする人物像」へとつながったり、逆行態の示す「影響を受けない」ことが、高い知識を持つ人物像を指標したり「対抗的コンテキスト」を創出したりする。また、使役態の「上下、力関係」の指示的指標が「さばさばしたスタンス」という非指示的指標へつながることなどの関係性が見られた。

日本語のヴォイス構文は、話者が言語主体として認知的意味、心的態度、社会的文化的意味などを表す言語装置である。話者はその構文機能をコンテキストを構成するために選択して意味を表現している。それゆえ、日本語のヴォイス構文は言語主体の主観表現にかかわる言語装置であると言える。

参考文献

- Croft, William., Cruse, Alan. (2004) *Cognitive Linguistics*. Cambridge University Press.
- フオード丹羽順子・小林典子・木戸光子・松本 哲洋 (2000) 「『構文動機』を記述した日本語教育のための文法：母語話者はなぜその文法形式を使うのか」平成 11 年度文部省科学研究費補助金基盤研究 C (1) (課題番号 11680308)
- Halliday, M.A.K.(1994) *An Introduction to Functional Grammar*. Second Edition. London, Melbourne, Auckland. Edward Arnold.
- Halliday, M.A.K.,& Matthiessen, Christian M.I.M.(2014) *Halliday's Introduction to Functional Grammar*. 4th edition. USA and Canada. Routledge
- 早津恵美子 (2005) 「現代日本語の『ヴォイス』をどのように捉えるか」『日本語文法』5 巻 2 号 pp.21-38
- 片岡邦好 (2002) 「指示的、非指示的意味と文化的実践：言語使用における『指標性』について」『社会言語科学』第 4 巻第 2 号. pp. 21-41.
- 古賀裕章 (2008) 「『てくる』のヴォイスに関連する機能」『ことばのダイナミズム』くろしお出版
- Mahsun, M.S. (2005) *Metode Penelitian Bahasa: Tahapan Strategi, Metode dan Tekniknya*. Jakarta. PT. Fraja Grafindo Persada.
- 益岡隆志(1984) 「『一テアル』構文の文法：その概念領域をめぐって」『言語研究』Vol. 1984. No. 86. 日本言語学会. pp.122-138
- (1987) 『命題の文法：日本語文法序説』くろしお出版
- (1991) 「受動表現と主観性」『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版
- (2001) 「日本語における授受動詞と恩恵性」『言語』30(5)大修館書店 pp.26-32

- 松本曜 (2011) 「作例と内省による研究例1: 『類別詞』と『主体的移動』の認知言語学的研究」 『認知言語学研究の方法: 内省・コーパス・実験』 ひつじ書房 pp.131-147
- Moleong, Lexy J. (2007) *Metodologi Penelitian Kualitatif*. Edisi Revisi. Bandung. PT Remaja Rosdakarya.
- 村木新次郎(1995[1991a]) 「ヴォイスのカテゴリーと文構造のレベル」 『日本語のヴォイスと他動性』 くろしお出版
- (1996[1991b]) 『日本語動詞の諸相』 ひつじ書房
- (1999 [1989]) 「ヴォイス」 『日本語の文法・文体:日本語と日本語教育』 4 卷 明治書院 pp.169-200
- 仁田義雄 (1981) 「態」 『日本文法辞典』 有精堂
- (1995[1991]) 「ヴォイス的表現と自己制御性」 『日本語のヴォイスと他動性』 くろしお出版
- 野田尚史(1991) 「文法的なヴォイスと語彙的ヴォイスの関係」 『日本語のヴォイスと他動性』 くろしお出版 pp.211-232.
- (1995) 「『文法的なヴォイスと語彙的なヴォイスの関係』より」 『動詞の自他』 ひつじ書房 pp.198-206
- 野村剛史(1995) 「自動・他動・受身動詞について」 『動詞の自他』 ひつじ書房 pp.137-150.
- Ochs, Elinor. (1992) Indexing gender. Reprinted. *Rethinking Context: Language as an Interactive Phenomenon*. Duranti, Alessandro dan Goodwin, Charles (eds.). Cambridge University Press.
- Otsuka, Hiroko., Suganda, Dadang., Kaswanti Purwo, Bambang., Sobama, Cece. (2018) Fungsi Indeksikal Referensial dan Nonreferensial pada Konstruksi Diatesis Bahasa Jepang. *Metalingua*. Vol.16. No.1. Balai Bahasa Jabar. pp.47-62
- Otsuka, Hiroko. (2018) *Penentuan Pilihan Konstruksi Diatesis oleh Penutur pada Teks Naratif Pribadi Bahasa Jepang: Pendekatan Indeksikal Konteks Konstitutif*. Dissertation Padjadjaran University.
- 大島ダイヴィッド義和 (2011) 「内省に基づく意味の研究」 『言語研究の技法:データの収集と分析』 ひつじ書房 pp.73-89
- 坂原茂 (2003) 「ヴォイス現象の概観」 『言語』 32 卷 4 号 大修館書店 pp.26-33
- 佐藤琢三 (2007 [2005]) 『自動詞文と他動詞文の意味論』 笠間書店
- 澤田淳 (2006) 「ヴォイスの観点から見た日本語の授受構文」 『言外と言内の交流分野』 大学書林
- 柴田方良(1997) 「言語の機能と構造と類型」 『言語研究』 1997 年 112 号 pp.1-31
- (2000) 「ヴォイス」 『日本語の文法 I: 文の骨格』 岩波書店
- 清水啓子(2010) 「日本語「動詞+てくる」構文の逆行態用法について」 『熊本県立大学文学部紀要』 第 16 卷 pp.47-75
- Silverstein, Michael (1976) Shifters, linguistic categories, and cultural description. Basso, Keith., Henry, A. Selby. (Eds.) *Meaning in Anthropolgy*. Albuquerque: University of New Mexico Press.
- 住田(2010) 「日本語のコミュニケーションにおけるヴォイスの機能」 『日語日文学研究』 74-1 pp.165-186
- (2011) 『移動動詞「来る」の文法化とヴォイス機能』 神戸大学博士論文
- 高橋太郎他 (2006[2005]) 『日本語の文法』 ひつじ書房
- 田中真理 (1996) 「視点・ヴォイスの習得: 文生成テクにおける横断的及び縦断的研究」 『日本語教育』 88 号 日本語教育学会 pp.104-115
- (2004) 「日本語の『視点』の習得: 英語、韓国語、中国語、インドネシア語・マレー語を対象に」 『言語学と日本語教育 III』 くろしお出版
- 寺村秀夫 (1982[1986]) 『日本語のシンタクスと意味』 第 1 巻 くろしお出版
- Verschueren, Jef. (1999) *Understanding Pragmatics*. London. Edward Arnold Limited. NY Oxford University Press.
- 山田敏弘 (1999) 『日本語におけるベネファクティブの記述的研究』 大阪大学博士論文
- (2000-2002) 「日本語におけるベネファクティブの記述的研究」 『日本語学』 No.1-No.14 明治書院
- 山本裕子(2002a) 「『~テクレル』の機能について: 対人調節的な機能に注目して」 『言語文化論集』 名古屋大学国際言語文化研究科. pp.127-144.
- (2002b) 「『~テモラウ』の機能について『~テクレル』と対比して」 『名古屋女子大学紀要』 人文社会編 第 48 号. pp.263-276.
- (2003) 「『~テアゲル』の対人的な機能についての一考察」 『世界の日本語教育』 第 13 号. pp.143-160

メディア及びコーパス

「南十字」 『じゃかるた新聞』
『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 (KOTONOHA)

インターネットサイト

(<https://ameblo.jp/prof-hiroyuki/entry-10544507496.html>)
(<http://www.cantic.jp/q-a.html>)

Notes

- 1: Verschueren(1999)のメタ語用意識 (*metapragmatic awareness*)とは、特定の表現を意識的に用いることである。Silverstein (1976)のメタ語用とは発話の解釈の枠組みに関することで、コンテキスト化を意味する。
- 2: 経験者は言及事態に参与者として関与している時の話者を指すもので、いわゆる *experiencer* の概念とは異なる。

